Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No. 106

目次

特別展　猿投山
―祈る山、観る山、登る山―　2

名と銘　4

新選組の安藤早太郎は挙母藩士だった！　6

博物館を活用した授業づくり
～長篠合戦図屏風・火縄銃のレプリカの活用を通して～　8

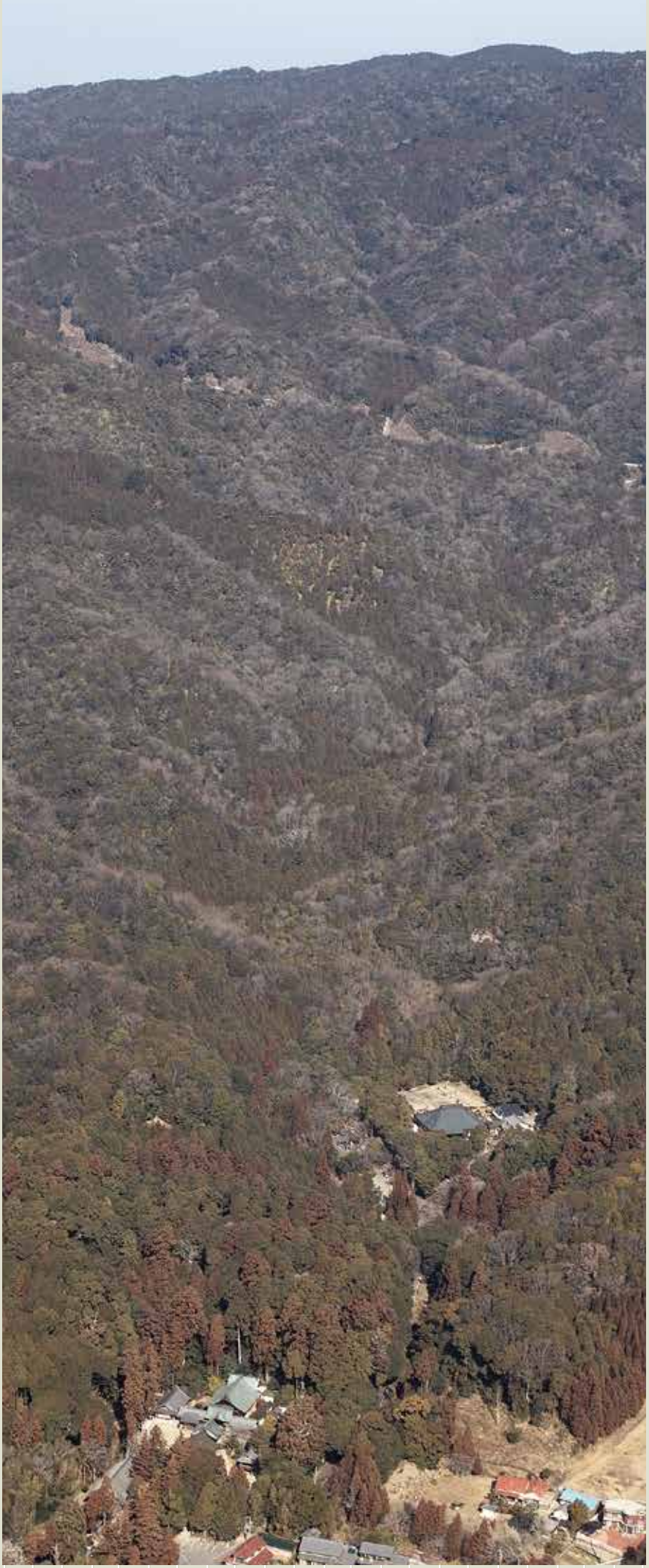
「とよたの歴史や文化財を学び、伝える」
とよた歴史マイスター 2019　9

企画展紹介
ーくらしのうつりかわりー『食べものと道具』　10

民具調査だより29　蒸し竈　11

新収蔵資料紹介番外編
市内の自然系資料の調査を進めています　12

ISSN 0919 - 0120
20191210 No.106



猿投神社と猿投山

特別展 猿投山 ―祈る山、観る山、登る山―

山との関わり

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことを趣旨に、8月11日を「山の日」として国民の祝日とする祝日法が、平成28年（2016）に施行されました。実際のところ、祝日が設けられたとしても、普段の生活の中で山との関わりを意識する機会は多くはないのではないでしょうか。ですが、山と人との関わりは古くから見られ、資料として残されていたり、生活の中の意識をしていないところで関わりがあったりします。

今年度の郷土資料館特別展は、猿投山を中心として、山の成り立ちや、山を構成する岩石、地質、それを仰ぎ見る人々が生み出した信仰や神話、またそれらに触発され発展していった登山・観光などを取り上げ、人と山との関わりについて紹介したいと考えています。

信仰と山

山は、時に郷愁や憧憬を、時に障壁としての畏怖を与え、それを仰ぎ見ながら暮らす人々の心象風景と強く結びついた存在です。そのような存在であるからこそ、神話の時代から人と山に関わる記録が残され、神話や寺社の縁起からは、神として信仰された山をはじめとした自然の地物や現象などと人々の関わりや意識を読み取ることができます。

ここでは、猿投山と猿投神社を例として取り上げてみたいと思います。猿投神社の背後に聳（そび）える猿投山（標高629m）は、豊田市と瀬戸市に跨り、尾張国と三河国を隔てる場所に位置しています。古くから人々の信仰の対象となり、南麓に猿投神社本社、山上の東峰に東宮、西峰に西宮が位置し、霊山として崇敬されてきました。近世前期にまとめられたと考えられている縁起書「猿投之本縁」によれば、猿投神社は、景行天皇の皇子で、ヤマトタケルの兄である大碓命（おおうすのみこと）を祭神とする縁起を持ちます。大碓命は『日本書紀』では美濃国へ封じられたとされますが、「猿投之本縁」では、猿投山山中で蛇に噛まれて亡くなり、猿投山頂上に葬られたとされます。大碓命がなくなった後、仲哀天皇の勅願によって山下に大碓命を祀る祠が造られ、それが現在の猿投神社本社とされています。

猿投神社の祭神については、中世までは猿投神社側の資料の中で書かれたものはほとんど見られず、本社は半行（はんぎょう）大明神、東宮は覚満（かくまん）大菩薩、西宮は智満（ちまん）権現という神仏習合に基づく仏号で呼ばれていました。

猿投山と猿投神社においては、古くから存在した猿投山への信仰があり、その後、山への信仰が猿投神社への信仰へと定着させられていったと考えられます。

特別展では、猿投山と猿投神社のほかにも、本宮山と砥鹿神社、飯盛山と足助八幡宮、六所山と六所神社などを取り上げて紹介します。

「とよた歴史マイスター」との共働

本特別展では「とよた歴史マイスター」の有志14名とともに、市内の校歌に歌い込まれている山をはじめとした景観について分析を行いました。校歌を分析対象に選んだ理由は、校歌に歌い込まれる対象は、その学校が所在する地域の人々の心象風景と強く結びついているのではないかと考えたからです。もしそうであれば、広域的に歌い込まれる対象と、ある一定の地域において歌い込まれる対象が存在するのではないか、一定の地域で歌い込まれる対象からその地域性を読み取れるのではないかと考えました。

校歌の分析は、まず市内の小中学校、高校の校歌の中から歌い込まれている山や川などの景観を抽出することから始めました。対象となったのは小学校75校、中学校28校、高等学校・高等専門学校15校の、計118校になります。抽出を進める中で、具体的な山や川の名前ではなく、抽象的な表現も多く見られました。また、学校の建つ場所を歌い込んでいる例も多く見られました。今回の分析では、具体的な山や川などの分析を行いたいと考え、具体的な山や川が特定できないものや学校の立地する場所については除外をして、抽出を行いました。

抽出を行った結果、山として19、川として９、その他として11の要素が得られました。山につい

ては、猿投山は挙母地区を中心として33校で歌い込まれていました。一方で、六所山が松平地区を中心として9校、村積山が上郷地区を中心として5校、飯盛山が足助地区で4校などと地域的な特徴も見てとることができます。調査にあたったとよた歴史マイスターの皆さんも含めて意外に感じたのは、段戸山（鷹ノ巣山）が市内各所12校の校歌の中に歌い込まていることでした。段戸山自体は豊田市街地から見ると、寧比曽岳（ねびそだけ）が手前にあるため直接見ることは難しい山です。段戸山周辺の山々を含めて、段戸山としている可能性もありますが、今回の活動の中での新たな発見でした。

特別展では、今回紹介したもの以外にも、古代から現代までの人々と山の関わりを紹介したいと思います。会期の終盤には、山に出かけるのに良い時期になってきます。特別展観覧後に登る山では新たな発見があるのではないでしょうか。（市澤　泰峰）

とよた歴史マイスターのみなさんとの作業風景

会　　期：令和２年１月18日（土）～３月22日（日）
月曜休館（ただし、祝日は開館）
開館時間：午前9時～午後5時
（入館は午後４時30分まで）
会　　場：豊田市郷土資料館
第１展示室・第２展示室
観 覧 料：一般300円　高校生・大学生200円
※中学生以下、70歳以上、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方及びその介護者 名は無料（要証明書等提示）

<関連イベント>

ギャラリートーク

①足下を見てみると―豊田の石―
水野 路子氏（とよた科学体験館職員）
日　時：令和２年２月15日（土）午後２時～３時
会　場：豊田市郷土資料館展示室
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

②名勝旧龍性院庭園の魅力
丸山 宏氏（名城大学教授）
日　時：令和２年２月29日（土）午後２時～３時
会　場：豊田市郷土資料館展示室
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

現地見学会

名勝旧龍性院庭園現地見学会
日　時：令和２年３月14日（土）午前10時～午後３時
午前10時30分、午後１時30分から２回、学芸員による現地解説を実施します。
会　場：旧龍性院庭園（豊田市　猿投町瀬戸田11番）
駐車場：猿投棒の手ふれあい広場　※猿投神社の駐車場には駐車しないでください
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

学芸員による展示解説

日　時：令和２年１月19日（日）・３月15日（日）午後２時～２時30分
会　場：豊田市郷土資料館展示室
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

名と銘

博物館資料の名称

博物館の収蔵資料には、資料名称がついています。管理上の必要性もありますが、本質的には、その資料が生み出された時代・地域でどんな存在だったのか、また、学術上どのように理解されてきたかを知る上での必要性から名が付されます。

お茶に関わる陶磁器の勉強をしていた頃、茶道具に「名」と「銘」が有ることを知りました。「名」は、「古瀬戸茶入」「高麗茶碗」のように、用途や時代・産地などにより特定される名称です。一方、「銘」には、所有者などその道具を評価した人が、その道具について「どのように愛着を感じ、何に見えたか」という心象で付けた、いわば愛称であるものが多く確認できます。

例えば、当館蔵の渡邉規綱公お手製の黒楽茶碗は、山路状を為す口を波に、釉の発泡を波しぶきになぞらえたのか、裏千家十四世　淡々斎宗室により「飛涛」という雄々しい銘が付けられています。

第三者が学術的に特定可能な「名」に対して、「銘」は、何らかの記載がなければ知り得ません。

黒楽茶碗 銘 飛涛（左）とその箱書き（右）

「名」と共に継承されてきた「銘」により、私たちは先人の記憶に触れることができるのです。

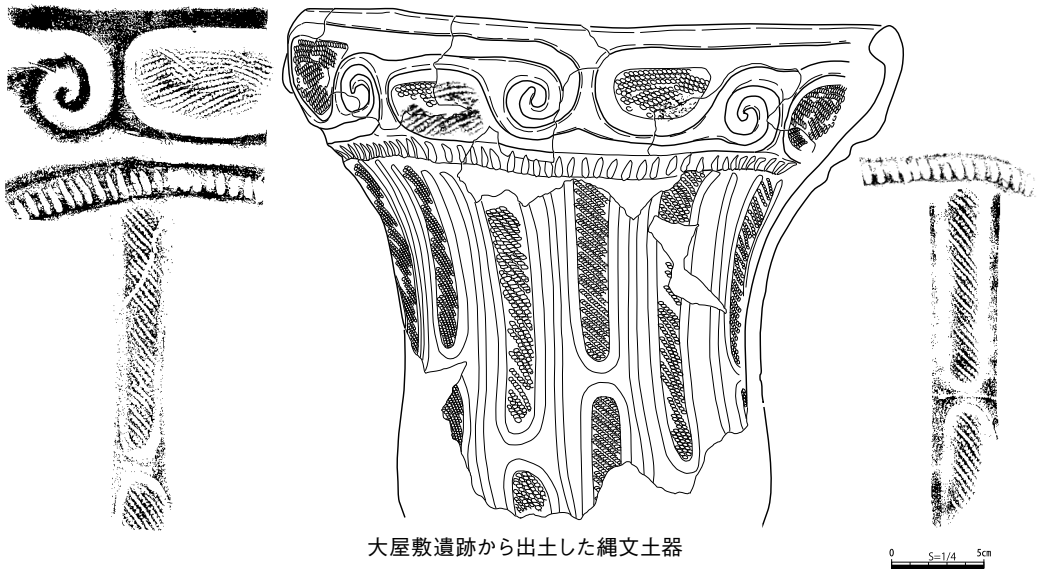
「名」の功罪

本来、かなりプライベートな存在である「銘」に対し、学術的な根拠に基づく「名」は、ものの来歴を示す、必須情報と言えるでしょう。そしてそれは、客観的な評価でありつつ、一方で誤った情報を与えるきっかけともなります。

例えば、市指定文化財である大屋敷遺跡（豊田市川面町）出土資料には、「大屋敷遺跡出土品」という、場所性のみを特定したかなり控えめな指定名称が付けられています。では、それらのうち、頻繁に展示で紹介される、縄文中期の土器１点を紹介する場合はどうでしょうか。

考古資料でよく見受けられるのが、型式名を付すケースです。学術上の整理により、使用された時期・地域が特定される一群、これを「型式」と言い、その良好な資料群が得られた遺跡名を型式名とします。しかしこの土器、私が土器研究者と話をする中でも、人によりその型式認定がぶれるのです。縄文時代中期後半でも新しい段階で、かつ、東日本的な文様要素を持った土器という点は一致するのですが、ある人は「東海地方西部の“取組式土器”の典型」と評価し、またある人は、「長野県南部の“親田式土器”の一部」と評価します。

私としては、「名」に拘泥する以上に大切にしたいことは、その資料の存在する意味です。この土器



大屋敷遺跡から出土した縄文土器

と見まがう類似例は、取組式土器や親田式土器と言われる様々な遺跡出土資料中でも限定されます。そしてそれらは、大屋敷遺跡から80㎞近く離れた遺跡でも出土しています。一方で、大屋敷遺跡の出土資料中では、この土器と酷似する土器が複数存在している訳ではないようです。

以上のような事実を念頭に置くと、縄文人にとっての遠隔地間の交流や土器生産の在り方について、より具体性を帯びて考えることができます。

しかし、例えば「長野県南部から運ばれた土器」とか「三河山地の縄文人が、長野県南部の土器を真似て作った土器」といった意味の名を付けると、新たな発見によりその名の根拠となった事実に修正を迫られる際、大きな弊害が生じます。

人工物であれ、自然物であれ、適切な「名」を付けるのは、とても難しいことのようです。

土偶の「名」

本市は、埼玉県出身の作家　田中順三氏より寄贈していただいた縄文時代の土偶を多数所蔵しています。土偶には、「遮光器土偶」や「ミミズク型土偶」といった学術名称があります。

遮光器とは、イヌイットの人々が雪中で着用する横一線の細長いスリットを設けたゴーグルのことで、明治時代の考古学者が、土偶の目の表現から、遮光器を着用しているのではないかと推測したことからその名が付いています。しかし、遮光器が必要な環境であるのなら、当然、同様の器物が実在しているわけで、そのような証拠が確認できない以上、真実性が薄い名称と言えるでしょう。しかし、あまりにもその名が一般化したため、現在でも用いられ続けている一例です。

ミミズク型土偶は、その容貌がミミズクに似ていることから名付けられました。遮光器土偶よりは罪作りでないとしても、粘土で作られた女性像と、鳥類のミミズクに関係があるかのような誤解を招いてしまいそうです。博物館で、「遮光器土偶」や「ミミズク型土偶」といった展示キャプションを見るにつけ、いつも不安な気持ちになります。

遮光器土偶（左）とミミズク型土偶（右）

小学生、土偶に「銘」を付ける

そんなことを考えていた矢先、企画展「土偶コレクション」（会期：令和元年10月26日～12月18日／会場：足助中馬館）の展示キャプション作成について、中馬館が所在する地元　足助小学校の４～６年生と取り組む機会をいただきました。

34人の子どもたちは、土偶を丹念に見て、仲間と品評し、気に入った土偶を手に取って観察し、土偶のキャッチフレーズと見どころを記しました。

それらのキャプションは、子どもらしさの面白みに加え、考えさせられるところが多くあります。

例えば、遮光器土偶に対して、「目が大きくてフクロウに似てる」とのコメントと共に「ふくたん」と名付けた子がいました。目が特徴と見い出した点は、考古学者と同様であることが分かります。

また、土偶が耳飾りをしているのではないか、と記した子もいました。確かに、土偶の中には、顔の左右両端に小孔が表現されているものがあり、考古学者はそれを耳飾りの表現と考えています。

実物を面白がって深く観察し、考え、自分なりに表現する。まさに土偶に「銘」を付けた訳です。

今回の郷土学習スクールサポートは、子どもたちにとって授業とかけ離れていたものだったかもしれません。しかし、教科の枠組みに当てはまりにくくとも、より深い所で成立する学びもあるのではないでしょうか。また、「銘を付ける」という行為を通じた博物館展示について、新たな可能性をも感じさせてくれました。

名と銘

子どもたちによるキャプションは、中馬館で土偶と共に展示されました。来館されたあるお客様は、資料のすばらしさを称賛しつつ、もっと専門的な見識も知りたいとつぶやきました。私がパンフレットを差し上げると、その方は大変満足し、夢中で土偶への想いをお話されていました。その様子を見つつ、私は、きっと人それぞれ思い抱く「銘」があり、それを共有できることは、未来の博物館の種になるのではないかと感じました。

先人が育てた「名」と「銘」。新博物館に向け、その意義を再認識し、施設設計や活動の準備に活かしていきたいと考えています。　（髙橋　健太郎）

新選組の安藤早太郎は挙母藩士だった！

1. 安藤早太郎とは

安藤早太郎は、江戸時代に豊田市中心部を治めた挙母藩の藩士でした。天保13年（1842）、奈良東大寺の西回廊（長さ106.8m）で挙行された通し矢において、一昼夜で放った矢数11,500本のうち8,685本を射通して、日本一の大記録を打ち立てました。しかし、藩内での軋轢もあり、嘉永4年（1851）に脱藩。その12年後に京都で結成された新選組の名簿には、副長助勤という重要な役職に沖田総司・永倉新八らと並んで安藤早太郎の名前があります。

2. これまでの研究略史

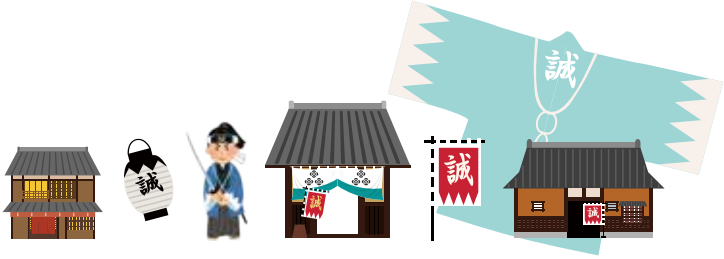
挙母藩の安藤早太郎と幕末の京都で倒幕勢力と相対した新選組の安藤早太郎は、同一人物か同姓同名の別人か。この問題については昭和30年代には記述があり、同40年代からは郷土史家の日尾野心清氏が同一人物の立場で精力的に研究を進めました。『豊田市史』年表（昭和57年刊）や人物編（同62年刊）には、早太郎が挙母藩脱藩後に新選組隊士になったと記され、新選組を扱う本の中でも、「元挙母藩士」と記述されることが多くなりました。筆者もその前提で、脱藩後の早太郎について記したことがあります（「安藤早太郎脱藩の謎」『豊田市郷土資料館だより』№5・6，1993）。いわば定説化していたこの見解に疑問を呈したのは、郷土史家の杉本育也氏でした。杉本氏は早太郎に関わる資料を詳細に分析し、両氏を安易に同一人物とみなすことに警鐘を鳴らしたのです（「挙母藩士 安藤早太郎 前」『研究紀要』第４集，豊田市郷土史研究会、2005）。

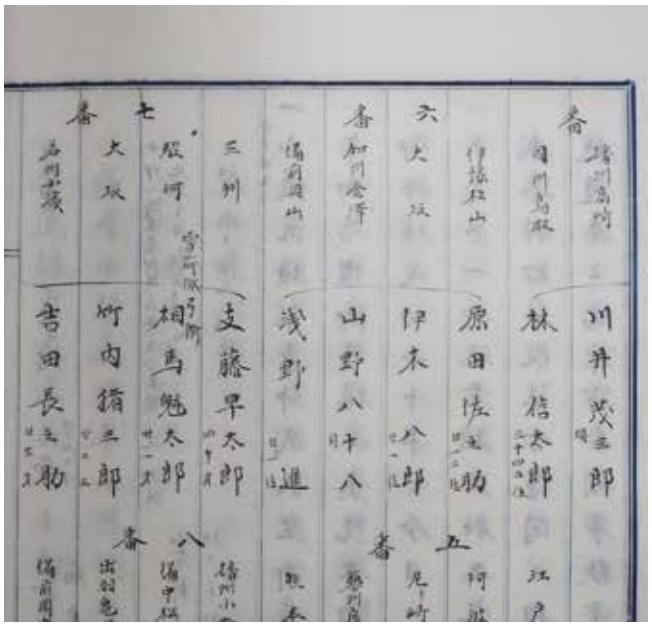
東大寺で弓を引き絞る早太郎
（松波佐平弓具店蔵）

脱藩後の早太郎について、明治期の挙母の資料は「京都の一心寺に入る」「浪士に伍しため殺される」「墓は京都の聞名寺にある」などと記していますが、早太郎が新選組に加入したという明確な記述はどこにもありません。また、挙母藩士の早太郎は、新選組結成時には40代半ばすぎでしたが、子母澤寛氏が子供の頃に新選組を見ていた八木為三郎翁の談話を掲載した『新選組遺聞』（昭和４年刊）には、早太郎が「まだ年も二十五六」と書かれていることも、同一人物説の弱みでした。この論争は新選組関係の本でも取り上げられましたが（伊東成郎『新選組残日録』新人物往来社、2007）、筆者はその後、京都の一心院や聞名寺と早太郎の関係性などを検討し、２人の安藤早太郎は同一人物である可能性が高いと考えました（「挙母藩の安藤早太郎は、新選組の安藤早太郎か？」『一弓入魂』豊田市教育委員会2014）。

3.「維新階梯雑誌」の出現

平成30年10月、書店で『新史料からわかった新選組の真実』（菊地明、洋泉社、2018）という新刊を手にとり開いてみると、宮内庁宮内公文書館所蔵の「維新階梯雑誌」に筆写されていたという文久３年（1863）12月の新選組の編成表が目に留まりました。初めて見る史料でしたが、七番隊5人の筆頭に安藤早太郎の名前があり、大いに興奮しました。そこには「隊士たちの出身地・年齢と添書きを省略し」と記されていたため、早太郎論争の決め手になると直感し「維新階梯雑誌」について調べたところ、すでに雑誌で紹介されていたことが分かりました（『新選組10人の





「維新階梯雑誌」（宮内庁宮内公文書館蔵）

隊長』洋泉社、2016）。早速注文し、数日後に届いた雑誌を急ぎ開いてみると、伊藤哲也氏の「隊士名簿発見！」という記事がありました。「維新階梯雑誌」の該当部分の写真も掲載されており、安藤早太郎（「支藤早太郎」と記されるが筆写時の間違い）の名前には、なんと「三州」「四十才」という添書きがあったのです。三河出身で年齢40歳。同一人物説を否定する最大の根拠となっていた『新選組遺聞』にある年齢「二十五六」は、八木翁の記憶違いか、子母澤氏の創作であったことが明らかとなりました。実際よりも少し若いのは、他の隊士よりもかなり年齢が高かったため、入隊時にサバを読んで申告したのでしょう。加えて、早太郎の左には「雪荷派弓術」の添書きがあります。一見すると左側の人物の情報のように見えますが、武芸などの添書きの多くは筆写時に左側にずれているため、本来は早太郎の説明です。新選組は治安維持組織として、さまざまな武術の使い手を求めており、剣の達人が揃う新選組の中で、早太郎は弓士としての抜群の経歴も評価されていたのでしょう。その後、宮内庁宮内公文書館において「維新階梯雑誌」の原本を確認した結果、二人の安藤早太郎が同一人物であることはほぼ決定的になったと言えます。

4. 脱藩後の安藤早太郎

通し矢日本一という挙母藩では類をみない栄誉を得て、藩名を広く世間に知らしめたにもかかわらず、挙母の資料は早太郎についてみな口をつぐんだ観があります。維新を成し遂げた明治の世に、新選組隊士を語ることははばかられたのでしょう。

嘉永４年７月に脱藩した早太郎は、やがて京都知恩院に隣接する一心院に身を寄せますが、その後還俗し新選組に加入。その前身である壬生浪士組の文久３年５月25日の名簿には、34人中19人目に安藤早太郎の名前が登場します。14人目までが結成当時の、それ以降が４月からの募集に呼応し加入した隊士であるため、早太郎が極めて早い段階に入隊していたことが分かります。同年9月に芹澤鴨以下15人が有栖川宮邸に参上した記録の中にも早太郎の名前が見えます（あさくらゆう『新選組を探る』潮書房光人社、2014）。『新選組遺聞』には「京都の地理が詳しい」とありますが、京都の寺で身に着けた土地勘や、武芸の実績をもつ年長者であることによって、隊の中でも重用されていた様子がうかがわれます。

そして、元治元年（1864）６月５日、あの池田屋事件が起きます。新選組のうち近藤隊10人ほどが志士たちの集まる池田屋を襲撃、早太郎は奥沢栄助と新田革左衛門を従えて裏口を固めたとされています。池田屋の戦闘は凄惨を極め、脱出を図る志士たちが裏口に殺到しました。迎え撃った早太郎ら3人は深手を負い奥沢は即死。早太郎は壬生の屯所に戻りましたが、７月22日に息を引き取りました。

挙母で生まれ武芸の腕を磨き、大きな誉れを手にしながらも脱藩した早太郎が、新選組に加入するまでの足取りはなお不明なことばかりで、今後も研究が必要です。最後に壬生の屯所で臥せった夏のひと月余りの間、元挙母藩士安藤早太郎の胸にふるさとの風景や記憶は去来していたのでしょうか。

（森　泰通）

博物館を活用した授業づくり

～長篠合戦図屏風・火縄銃のレプリカの活用を通して～

博学連携のねらい

博学連携には二つのねらいがあります。

① 新学習指導要領や学校の先生からの要望に基づいた、学校教育における博物館の必要性（授業づくりに生かせる博物館）の具現化。

② 豊田市博物館基本計画における新博物館機能「学習支援・創造機能」（「とよた」を学ぶ・未来を生み出す）の実現。

この二つをねらいとして、令和５年度の（仮称）豊田市博物館開館にむけて、郷土学習スクールサポートの充実を図っています。

１回行けば、３度おいしい博物館

博物館を活用した授業の効果として、以下の三点が期待されます。

① 子どもの？（疑問・つぶやき）に答えることができる。

② 郷土の自然や文化に愛着をもつことができる。

③ 新たな疑問や調べたい意欲をもち、息の長い深い学びにつなげることができる。

♪１粒で２度おいしい　お菓子のCMでおなじみの曲です。博物館を活用した授業では、これを超える「１回行けば、３度おいしい」学びの実現をめざしています。

博学連携のシミュレーション～未来の授業構想～

⑴博物館へ行こう！

児童Ａ：信長って、長篠の戦いで効果的に火縄銃を使ったって授業で学んだよ。火縄銃って今の銃と違うのかなぁ？

児童Ｂ：時代が違うんだから今のとは違うでしょう。

児童Ｃ：じゃあ、信長はどうやって火縄銃で勝ったの？どんな戦いなのかすごい気になるんだけど！

先　生：みなさん、盛り上がっていますね！疑問をもつことは素晴らしいことです。では、来週博物館に行って実際に本物を見たり触ったりしながら、みなさんの謎を解明しませんか？

児童Ａ：やったぁ～！楽しみだね！

⑵「ホンモノ」に触れることで味わう感動

【三英傑を探している様子】

子どもたちは、教科書では体感できない大きさの屏風に触れることで、長篠の戦いのスケール感を味わうことができました（この写真は実物ではなくタペストリーを見ている様子）。

児童Ａ：屏風ってこんなに大きく、山折り谷折りといった感じで折れているんだね。

児童Ｂ：槍をもったり、火縄銃を撃っていたり、馬に乗っていたりしている人がいっぱいいるね。

「ホンモノ」に触れて体験したからこその感動を味わうことができました。

⑶実際に火縄銃のレプリカに触って学習課題にせまる

【火縄銃の重さを体感する様子】

実際にレプリカを触った子どもは、「こんなに重いもので戦ったなんて信じられない」「火縄銃を撃つのに２～３分もかかったのがわかる気がする」といった感想をもちました。子どもたちは、火縄銃の重さや撃つことの大変さを体感したことで、連合軍が勝利した他の理由を追究したいと考え、学習課題にせまる姿に変わっていきました。

⑷古地図を利用して多面的に考える

子どもたちは江戸期に作成された設楽原の古地図を見て、「武田軍の騎馬隊は田んぼや畑が多いので、足をとられて上手に戦えなかったと思います」と考えました。

長篠の戦いは火縄銃を活用したことで有名ですが、地形を上手に利用した戦いでもあることを知り、多面的に考えるようになりました。

⑸息の長い深い学びへ

【長屋門を訪問した様子】

子どもたちは、長篠合戦図屏風に豊田市ゆかりの武将である渡辺守綱が描かれていたことを知り、さらに追究するために遊佐家長屋門、旧松本家長屋門へ学習に行きました。

博物館を活用した授業づくりの成果

児童Ａ：博物館に行ったら、実際に本物を見たり触ったりできるから、教科書ではわからないことがわかったね。

児童Ｂ：長篠の戦いが僕たちの住む豊田市にも関係があることを知ってうれしかった。

児童Ｃ：今度は渡辺守綱についてもっと詳しく知りたいな。

子どもたちの感想からもわかるように、博物館を活用した授業づくりでは、「１回行けば、３度おいしい」＝「子どもの３つの学びを保証する」ことができると考えています。

（山岸　怜）

「とよたの歴史や文化財を学び、伝える」

とよた歴史マイスター 2019

とよた歴史マイスターの活動は、今年で５年目を迎えました。今年度登録しているマイスターは88名。「とよたの歴史や文化財を学び、伝える」活動を行っています。大きく分類すると次の３つの活動になります。

【講座・研修】… 基礎講座、実践講座、各種研修会など
【ガ　イ　ド】… 展示・史跡ガイド、体験講座やスクールサポート支援
【研　　究】… 学芸員やマイスター自身の提案による自主活動

10月末現在、のべ**320名**のマイスターが上記の活動に参加しています。**【講座・研修】に97名、【ガイド】に205名、【研究】に18名**の方が参加されています。

みなさんご自身のできる範囲で、可能な時と場所で精力的に**「学び、伝える活動」**に加わっています。特に、豊田市郷土資料館の事業にかかわる活動だけでなく、各マイスター自身の居住する地域での歴史や文化財を**「学び、伝える活動」**も盛んに行っています。

マイスター活動紹介

各地域編

各地域での「学び、伝える」活動の一端を紹介します。

☆猿投台交流館、わくわく事業で活動

猿投台交流館自主グループ「歴史を知る会」、わくわく事業で活動。冊子や看板、史跡巡りなどで地域の魅力を伝えている。学校へのサポートも行っている。

☆保見交流館自主グループで活動

交流館自主グループ「保見の歴史を伝える会」で活動。広見城址整備、伊保郷史跡見学や古文書をもとに郷土の歴史を伝えている。

☆上郷中学校で地域学習講師として活動

上郷中、寿恵野小校区内にある史跡の案内人を務めている。それぞれの史跡に詳しい地域の仲間と野外や教室で子どもたちの学びに貢献している。

☆挙母祭りや七州城下町を伝える活動

地元の小中学生だけでなく、他市から挙母祭りや七州城下の見学に来る方々に対して、まちづくり協議会の仲間とともにその魅力を紹介している。

【猿投台地区での史跡巡り】

【童子山小3年生まち探検の講師】

郷土資料館事業編

今回は、14名のマイスターとともに行っている、郷土資料館の特別展に向けた調査分析活動を紹介します。

特別展「猿投山 ―祈る山、観る山、登る山―」に向けて

特別展に向けて、豊田市内の学校の校歌の歌詞に出てくる山や川、地名などを地図に落とし、校歌と景観の関連を調査分析しています。

校歌に歌い込まれる対象は、その学校が所在する地域を象徴するものなのではないかという仮説のもとに作業を進めてきました。

特に、ある一定の地域において歌い込まれる対象は、地域の意識がどこに向いているのかを考える上で非常に示唆に富んでいるのではないかなど、多くの発見を楽しんでいます。

●企画展紹介●

―くらしのうつりかわり―『食べものと道具』

大昔から現代まで、くらしの中で使われてきた「生活の道具」を振り返ることで、私たちの生活の変化を理解することができます。

今回の企画展は、郷土資料館がこれまで収集してきた多数の生活の道具の中から、私たちがくらしていく上で欠かすことのできない「食べもの」に関する道具を紹介していきます。どのような方法で食べものが加工・調理されていたのか、さまざまな道具を取り上げて食生活のうつりかわりを考えます。

最後の「かまど」・「改良かまど」

ここでは、展示品の一つ、「改良かまど」を紹介します。「かまど」とは、火を焚く場所を中心に周囲を壁状に囲み、その壁の一部に薪をくべる焚口を設けて、上から鍋や釜をかけて煮炊きを行う道具です。

「かまど」の歴史は古く、日本には古墳時代に朝鮮半島から伝わりました。発掘調査の際では、竪穴住居の中から「かまど」の痕跡が見つかることがあります。このように1,500年以上の歴史がある「かまど」ですが、その後長い年月の中で形・材質を変え、最後の「かまど」である「改良かまど」が登場します。

「改良かまど」が登場する背景には、女性の地位向上と自立のため、全国の農村部を中心に昭和20年代に展開された生活改善運動があります。持ち運び可能で表面がタイルで装飾された「改良かまど」は、女性が長時間拘束されていた台所の環境改善の一環として推奨され、家の土間部分に作りつけられた従来の「土かまど」に代わって普及しました。「改良かまど」には、煙突に加え焚口に蓋が取り付けられていたため、従来の「土かまど」とは違って建物内に煙が充満しなくなり、調理を行う女性の健康に対する影響が減少されました。また、熱を逃さないことで薪の消費が抑えられ、調理時間も短縮されました。さらに「改良かまど」は運搬が可能なため、台の上などに設置することで、かがまずに立った姿勢で炊飯できるようになり、炊事の利便性が向上しました。

改良かまど

●カマド・エントツの整備と
タバコの吸いガラには十分注意を

カマドの火の不始末、エントツの火の粉で起る火災は、以前より少くなってきましたが、まだまだ発生原因のおもな理由にあげられています。カマドは、とくに周囲や裏側の過熱に十分注意し、また、余分な燃料をおかないようにしてください。あと始末も確実に。火災原因のトップにあげられているタバコは、かならず吸いがら入れのある所で吸うようにし、また、歩きながら吸うことや危険な場所で吸うことはつつしまなければなりません。このほか、寝タバコなども十分ご注意を。

また最近、スプレー式になっている整髪料、殺虫剤、塗料などによる火災がめだっています。使用した後はガス抜きしたり、捨れたりしないよう注意し、完全に栓をしてください。ひとりひとりの注意が火災を防ぐ重要なかぎとなります。

広報とよた記事
(昭和42年12月号)
昭和40年代の初め、プロパンガスが普及する一方で、「かまど」は火災の原因とされていました。

しかし、昭和40年代になるとプロパンガスが普及し、一方で「かまど」が原因とされる火災が問題視されるようになりました。また、都市部においては集合住宅が増加し、住居面積が縮小する状況も加わり、「改良かまど」は姿を消し、ガスコンロに取って代わられることとなりました。そして今は、IHクッキングヒーターが普及しつつある時代です。

今回紹介した「改良かまど」のように、生活に関わる道具は、社会状況や住宅事情の変化など、人々の生活の変化に合わせて常に移り変わっていきます。企画展では、「かまど」の他にも様々な生活の道具を展示していますので、ぜひご覧いただき、生活のうつりかわりを実感してください。

思い出募集

現在、「かまど」をはじめ、展示中の資料を実際に使用していた方は少なくなっています。そのため、展示期間を通じて、道具を使用した貴重な思い出を収集し、今後のスクールサポートや展示等、郷土資料館の活動に活用していきたいと考えています。ご協力をよろしくお願いいたします。

（安藤　由真）

豊田市郷土資料館企画展
―くらしのうつりかわり―『食べものと道具』

会　　期：令和元年12月14日㈯～令和2年3月8日㈰
　　月曜休館（祝日の場合は開館）
　　年末年始休館（12月28日～1月4日）
　　臨時休館（令和2年1月6日㈪～1月17日㈮）
開館時間：午前9時～午後5時
会　　場：民俗資料館（豊田市郷土資料館内）

関連イベント

・展示解説
令和元年12月14日㈯、令和2年3月8日㈰
両日ともに午前10時～午前10時30分

・古い道具で作る料理体験
日　時：令和2年1月11日㈯
　　午前10時30分～午後1時
場　所：崇化館交流館 調理室（豊田市昭和町2−46）
内　容：稲武地区に伝わる米粉のお菓子「からすみ」を、挽臼（ひきうす）や蒸籠（せいろ）など、昔の道具を使って調理する体験。
対　象：小学生以上の子どもと保護者
定　員：10組（応募多数の場合は抽選）
参加費：1人200円（材料費）
申込み：令和元年12月23日㈪［消印有効］までに〒住所・氏名（ふりがな）・年齢・電話番号を記入して往復はがきで郷土資料館まで

・昔なつかし！ポン菓子実演
日　時：令和2年2月22日㈯、午前10時～12時
場　所：郷土資料館前庭
備　考：お米がなくなり次第終了

蒸し竈 ムシカマド

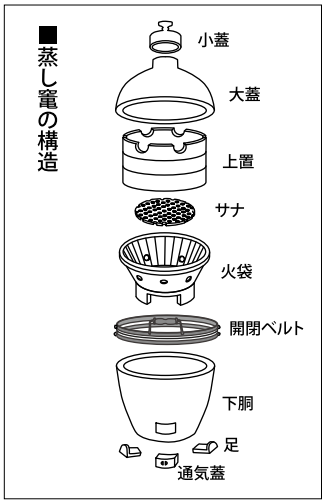
米・麦などを蒸したり煮たりして食する場合の意味に、「炊(かし)ぐ」という言葉がありますが、この炊ぐにも、湯取り・湯立て・蒸し飯・炊乾(たきぼ)し等、さまざまな方法があり、また炊ぐための鍋・釜・甑(こしき)・炉・竈などの道具も多様でした。炊ぐ道具の移り変わりの中で特異な性格を備えた道具が“蒸し竈”です。一般的に行われていた竈に羽釜をかけご飯を炊く“炊乾し”という手法に“蒸す”という行為をプラスした道具が蒸し竈です。これで炊いたご飯は大変美味しかったと言われています。

蒸し竈余話

蒸し竈は木炭を燃料として用いる粘土製・石綿セメント製と、ガスを燃料とする木製（内側は石綿）・石綿セメント製の４種類がありました。豊田市郷土資料館で収蔵しているのは、愛知県下の碧南や高浜の三河地方で製造された粘土製の製品です。

昭和元～2年（1926～1927）頃、福島県の平（現在はいわき市）にて、小鍛冶仁平という人が土製の蒸し竈の製造を始めましたが、福島の粘土では思うものができず半年ほどで製造をあきらめ、土製蒸し竈の製造権利を、当時東京品川にあった“極東商会（代表は服部ヒトシ）”に委ね、自分は火に強い三河の“バカ土”を求めてこの地に移り住み、高浜の𠆢森吉商店に製造を依頼しました。𠆢の番頭であった「シバタアイジロウ」（漢字表記不詳）が努力して製造を始めましたが、蒸し竈は部品も多く、その製造はなかなか厄介で手間がかかるので、土器製造業者に生産をまかせようと、碧南の“丸か製陶所”に生産を託しました。これが昭和３～４年頃で、それ以降降本格的に「小鍛冶式一極東むしかまど」の製造が始まりました。昭和５年頃からは、関東一円・東北・北海道へと貨車で大量に出荷されるようになり、以降日本全国に広まりました。昭和12～16年頃が蒸し竈の第一次最盛期で、冨士・大黒・ゑびす・日の丸等のラベルを付けた蒸し竈が世に出ました。この当時の三河土器の産地は「しゃば中蒸し竈一辺倒だった」といわれるほどであったといいますが、昭和16～17年頃の炭の統制で生産が一時ストップします。敗戦後には、製造が再開されました。

極東ムシカマド
Wφ470 H693 Dφ462



進駐軍とバーベキュー

昭和30年頃、蒸し竈に大きな転機が訪れます。立川の飛行場前にあった土器屋に置かれていた蒸し竈を目にした米軍将校が、試しにこれで肉を焼いて食べてみたら「Very Nice !」であったらしく、それ以来立川のキクカワ商店を通じて、御用納めで各地の米軍基地へ送られるようになりました。また帰国する兵隊が軍用機でアメリカまで持ち帰るようにもなり、蒸し竈は海を渡り、バーベキューカマドとして販路を広げました。あまりにも人気で、軍用機ではまかなえなくなり、横須賀・神戸の港から大量に出荷もされました。この現象が昭和44～45年頃まで続いたといわれています。

■アメリカ向けのカタログ

（東海民具学会 岡本　大三郎）

新収蔵資料
紹介番外編

市内の自然系資料の調査を進めています

令和５年度（2023年度）中の開館を予定している（仮称）豊田市博物館（以下、新博物館）は、自然分野も扱う総合博物館を目指しています。豊田市内には、自然に関わる施設や地域資料館が数多くありますが、標本などの自然系資料については、市内全体で、どのような資料がどれほどあるのか分かっていません。このため、今年度から市内の各施設を対象に、全体像を把握するための調査を進めています。

自然系資料と一口に言っても、動植物から地質まで、その分野は多岐にわたります。新博物館で全ての資料を収蔵することは物理的にも困難であるため、市内の自然関連施設と協力しながら資料の収集・保存を行っていくことが不可欠です。また、それらの資料を相互活用することで、より充実した展示や講座を行うことができるようになります。今回の調査結果をもとに、新博物館を含めた市内の自然関係施設同士で連携しながら、豊田市全体での自然系資料の充実を目指していきたいと考えています。

また、今年度には、長年にわたり豊田市内の淡水魚類を調査・研究をされてきた梅村淳二氏から、貴重な淡水魚類の標本をご寄贈いただきました。標本瓶90本以上にも及ぶ標本は、矢作川研究所と共に中身の確認や割れた保存瓶の交換など、長期保存のための処置を行いました。こうした、豊田市の自然の移り変わりを示す貴重な標本を守り伝えていくことも、新博物館の大切な使命といえます。

現在の豊田市郷土資料館には、自然系資料を整理し、収蔵していく設備が十分にあるとはいえません。関係施設や豊田市の自然に関わる皆さんの力を借りながら、新博物館での自然分野が充実できるよう、一歩ずつ作業を進めていきます。

（酒井　博嗣）

ご寄贈いただいた
魚類標本の一部

地域資料館の昆虫標本

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前９時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）、年末年始
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より北へ　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ 徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.106
令和元年 12 月 10 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町 1 -21-2
TEL.0565-32-6561　FAX.0565-34-0095
E-mail●rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL●http://www.toyota-rekihaku.com
FB●http: //facebook.com/toyotarekihaku
※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。